

# 『から騒ぎ』再読

## —戦争帰還者の精神的病と回復

遠藤花子

### 序論

『から騒ぎ』(*Much Ado about Nothing*) は、シェイクスピア作品の中でも“mature comedy”と言われたり、“joyous comedy”と評される (Bryant 125) など、劇の持つ喜劇性について様々な角度から論じられてきている。また、ベネディック (Benedick) とビアトリス (Beatrice) の関係と『じゃじゃ馬ならし』(*The Taming of the Shrew*) のペトルーキオ (Petruccio) とカタリーナ (Katherina) との関係の比較や、ドン・ペドロ (Don Pedro) とクロードイオ (Claudio) の関係と『ベニスの商人』(*The Merchant of Venice*) のアントーニオ (Antonio) とバサーニオ (Bassanio) との関係の比較、ドン・ジョン (Don John) と『リア王』(*King Lear*) のエドモンド (Edmund) との比較など、シェイクスピア劇における登場人物の人間関係を他の劇と比較をした性格批評、更に、近年ではパフォーマンス研究の側面からも活発な議論が行われている。

しかし、『から騒ぎ』の作品の構造に注目すると、兵士が戦争から戻るところからストーリーが始まる戦争帰還者の物語とも指摘することができる。とは言え、作品の中に戦争の過激な戦いのシーンが存在することもなく、戦いで血を流す人の姿や、攻撃されて住むところや家族を失った人の悲惨な姿もなく、反戦的などころも、戦時中から戦後にかけて見られる特有の重苦しい雰囲気もまったく感じられない。むしろ、兵士が戦地から帰還する最初の場面から、日常を楽しむ女性たちの高らかな声が舞台となっているシシリー島 (Sicily) のメシーナ (Messina) の空に響き渡っている。『から騒ぎ』の最初のシーンに登場する使者の手紙から、男性たちがもうすぐ

戦地から戻ってくることが知らされ、舞台は楽しさ、嬉しさといった明るい声で満ち溢れている。まさに、ここから始まろうとしているのは、戦争から戻ってきた男性と、その男性たちを待つ女性を始めとする村人たちのドタバタ騒ぎなのである。

しかし、笑い声が響く一方で、戦争の余波を引きずり、素直に平和を味わうことのできないドン・ジョンの姿もある。彼は役柄上、「劇中の悪人役」とみなされがちだが、戦争に負けた屈辱を味わっている「敗者」なのである。シェイクスピアの喜劇は、最終場面で結婚が決まる幸福な人がいる一方で、その主役たちを憎み、そのハッピーエンディングの仲間に入ることのできない人物が登場する傾向にある。今回、その役割を担うことになったのがドン・ジョンである。彼は戦争敗者というレッテルを貼られ、戦争で敗北した相手が義兄のドン・ペドロであったことから、ドン・ペドロに対して根深い恨みを抱いている。単に人から嫌われる役ではなく、自ら心を閉ざして人を嫌い、壁を作り、嫌われ者になっている。本稿では、敗者ドン・ジョンと戦争勝者たちを比較することで、何が戦争中の疲れと心の回復をもたらしたのかについて分析した後、この劇を彼らの精神面を支えた環境と、女性たちによるサポートの視点から考察していく。

## 1. 戦争の勝者と敗者

戦争を通して英雄になれなかった人々の精神的苦痛や、戦争中の経験から生じたトラウマといったものは、それぞれの時代に生じた戦争の、戦中戦後に書かれた文学作品において、主なテーマの一つを占めてきたことは言うまでもない。『から騒ぎ』は、戦争終結の知らせからストーリーが始まり、戦争から帰還する人を心待ちにしていた女性たちと、帰還した兵士との対話でストーリーが成り立っている。『から騒ぎ』の第一声は、メシーナの領主、レオナート（Leonato）による“I learn in this letter, that Don Pedro of Arragon comes this night to Messina”(1. 1. 1) である。プロローグもなく、最初の場面から戦地に赴いた兵士たちがもうすぐ舞台であるシシリー島の

メシーナに到着することが告げられ、彼らを待つ人々の笑顔から始まっている。しかも、この戯曲においては、男女の恋遊びと、めでたく2組の結婚が決まるシーンが結末のため、ストーリー全体が華やかなものとなり、劇の結末までに男性たちが戦争から帰還したばかりの人たちであることを忘れさせられるのである。

最初の場面の使者とレオナートとの対話から、今回の戦争で死傷者はほんのわずかであり、男たちは戦地に赴いた時のままの姿で戻ってくることが分かる。大抵は勝者であろうと敗者であろうと戦後には何らかの疲れを引きずりながら戻ることが多い。にもかかわらず、無傷なのは激しい戦いをせず勝利を手にしたということである。勝者にとってはこれほど嬉しいことはない。嬉しさを隠せないのは、兵士たちを出迎える側も同じである。レオナートは“A victory is twice itself, when the achiever brings home full numbers. I find here, that Don Pedro hath bestowed much honour on a young Florentine called Claudio.”(1. 1. 7-9) と言うなど、負傷者が少なかった喜びに加え、この戦いでいい働きをした兵士を称えている。ここからレオナートは最初からクローディオに好意を寄せていたことが読みとれる。更に、この場面では、ビアトリスによるベネディックに対しての毒舌がすかさず飛び出す。舞台は勝者に対する称賛の話題で持ち切りとなり、ビアトリスによる悪口も全て笑いとなる。そこへ兵士が到着し、更に歓喜が増す。

そして戦争中は大活躍だったと噂されたクローディオは、戻るや否やレオナートの娘、ヒーロー（Hero）に惚れ込み、恋煩いに陥る。戦地に行く前は戦争で活躍することのみ頭にあり、勇敢な兵士としてもたたえられるほどであったが、今は好戦的なところはまったく見られない。クローディオは、血気盛んな若者から沈鬱な若者へと変化する。自身の変貌ぶりに気付いたクローディオは次のように語っている<sup>1</sup>。

O, my lord,

When you went onward on this ended action,

I looked upon her with a soldier's eye,

That liked, but had a rougher task in hand,  
 Than to drive liking to the name of love;  
 But now I am returned, and that war-thoughts  
 Have left their places vacant, in their rooms  
 Come thronging soft and delicate desires,  
 All prompting me how fair young Hero is,  
 Saying I liked her ere I went to wars. (1. 1. 223-31)

戦争前は目に入らなかったものに気づくなど、帰還した今、兵士としての感覚はまったくなくなっている。ヒーローに惚れる姿は英雄としての姿から程遠く、戦争中は優れた武人であったとしても、帰還するとまったく別の人間になりうることも暗示されている。

平和に浸る人々のドタバタ騒ぎ (ado) がストーリーの主筋となっているが、一方で戦争敗者のドン・ジョンも同時に登場する。彼は義兄と戦争をして敗北、という屈辱に遭っている。心の中ではまだドン・ペドロとまったく和解できていない様子と、和解は見かけ上のものに過ぎないことは、ドン・ジョンの会話の少なさからも分かる。この場面においてドン・ジョンのセリフは、“I thank you, I am not of many words, but I thank you.”(1. 1. 116)と歓迎されたことに対する礼を述べた一行のみしかない。人前では義兄への恨みをぶちまけることもなく、敗者としての苦しみの態度を示すこともしなかったが、思うことを口に出せず、彼は常に心の中に闇を抱えている。ドン・ジョン自身、勝手に人々の視線が厳しいと誤解し、心を閉ざしてしまったとも言える。

戦争中の模様は省略されているが、戦争後の悩める人の姿がドン・ジョンに表れている。戦争から引きずるトラウマ症状は一般に「失われた世代」(Lost Generation) と呼ばれるアメリカの作家の作品によく描かれていることであるが、精神的苦痛を味わっている姿はドン・ジョンの中にも見られる。ドン・ジョンの場合、死傷者のほとんどいない戦いで敗北し、しかも戦いの敵が義兄であったことから、プライドが更に傷つけられている。ド

ン・ペドロに痛撃を加えられたとしたら、追い詰めたという自負心から異なる場面展開もあったかもしれない。しかし、ほとんど死傷者もないような戦いで敗北し、戦後に苛立ちのみが残されてしまったのである。このような負け方をすれば、かなりの屈辱であることにちがいない。

実際にイギリスはばら戦争 (the Wars of the Roses) があり、更に100年戦争 (the Hundred Year's War) を経験した。シェイクスピアは歴史劇の中でこれらの戦争を描いているが、作品全体を通して戦争に触れている。シェイクスピア劇の中で激しい戦争の様子を描いているものとして、『ヘンリー5世』(*King Henry V*)や『リチャード3世』(*King Richard III*)、『コリオレイナス』(*Coriolanus*)などが挙げられるが、戦争の終結と今後への期待が物語のクライマックスになっている。激しい戦いの後、やっと和平を結び、戦乱の世に終結を告げる設定である。

戦争後から劇が始まっているものとしては、『から騒ぎ』のほかに、『タイタス・アンドロニカス』(*Titus Andronicus*)が挙げられる。『タイタス・アンドロニカス』は復讐によってもたらされた悲劇が描かれているが、敗者を親切にもてなした結果訪れた惨事で成り立っている。『から騒ぎ』は喜劇、『タイタス・アンドロニカス』は悲劇であり、まったく異なる戯曲に見えるが、敗者を親切にもてなすことによって、悲劇に見舞われる人々の姿が共通して見られる。敗者にとって親切にされることは却って屈辱的なことなのかもしれない。

『から騒ぎ』では、戦争の勝者と敗者の両方が描かれているが、焦点は勝者であり、敗者はあくまでも勝者の引き立て役となっている。この戯曲の中では戦争そのものの恐怖心や復讐心をさらけ出すのではなく、戦後の平和の様子が中心に描かれている。戦争から無事に戻り、安堵と喜びと平和の素晴らしさに浸っている男たちが主筋を担っているため、恋に関しても、他のシェイクスピアの戯曲で一途に恋をし、浮かれている男たちとは異なる。彼らは戦争で疲れきった魂を取り戻すために、若者が起こす行動をしているにすぎないのではないだろうか。

## 2. 屋外と室内、仮面舞踏会と悪巧み

『から騒ぎ』では、室内の場面と屋外の場面が登場人物の心理状態を大きく分けるものとなっている。兵士が戦地から戻る最初の場面や、ベネディックとビアトリスのキューピットをしようとする人々がひと芝居打つシーンなど、人々の笑い声が響くシーンは全て屋外が舞台となっている。その一方で、室内のシーンになるや否や、舞台は様変わりし、暗い室内で一人憂いに沈むドン・ジョンが舞台に登場する。彼が最初に嬉しそうな態度を示したのは、クローディオがヒーローに恋をしているという情報をボラキオ（Borachio）が伝えた時である。戦争敗者として人の邪魔立てしできない可愛そうなドン・ジョンの姿である。

しかし、この場面では、ドン・ジョンの口数の少ない本当の理由が語られる。コンラッド（Conrade）が “What the good year, my lord, why are you thus out of measure sad?” (1. 3. 1-2) とドン・ジョンの憂いについて尋ねると、ドン・ジョンは、自分の憂いの原因を次のように語る。

I wonder that thou (being as thou sayest thou art, born under Saturn)  
goest about to apply a moral medicine to a mortifying mischief. I cannot  
hide what I am: I must be sad when I have cause, and smile at no man's  
jests: eat when I have stomach, and wait for no man's leisure: sleep when  
I am drowsy, and tend on no man's business: laugh when I am merry, and  
claw no man in his humour. (1. 3. 8-13)

土星のもとに生まれたことを挙げ、自らの生まれに対して不満を持っているドン・ジョンの姿である。ドン・ペドロに対して常にコンプレックスを持ち、戦争に負けたことも自らの生まれのせいにしてしている。しかし、不運な星回りのもとに生まれた悲しみを痛烈に見せつけることで観客の哀れみをそそっているが、その哀れみはボラキオが登場し、ヒーローとクローディオの恋仲を伝えた瞬間に消えてしまう。

イギリス・ルネサンス時代は占星術が盛んであり、病気の原因、治療の時期、薬草を集める時期や調合する時期など、全て天体の運行に関連付けられていた (Edgar 115) ことから、不運な人生も天体が左右すると考えられていた。医学者で錬金術師のパラケルスス (Paracelsus 1493-1541) も土星は長生きに影響を及ぼすものであると同時に、土星のもとに生まれると「鬱」の症状がでやすいことを述べているが、それは土星が黒胆汁液を過剰に出す作用があるとされたためである。人間の体を構成している4つの体液の分泌量が人間の性質を大きく左右するとされていたことは一般的に知れ渡っていることだが、それと同時に、木星は多血質を生む血液、金星は無気力を引き起こす粘液、太陽は短気や立腹の原因となる黄胆汁液と関連があるとされるなど、人の性格と星回りも相互に大きく作用するとされていた (Edgar 215)。このように、戦争敗者であることに加え、当時の占星術に関する概念からみても、ドン・ジョンが鬱に苦しむ理由と条件も整っていることが分かる。また、バートン (Burton) は、鬱の症状は、悪魔、異端者、単純さ、目に見えない激情、無知、孤独、高慢によるとし、また、その病状によっては、戦争や分裂、自殺などの原因になっている (Scott 23) ことを述べている。

ドン・ジョンの恨みを抱いている敗者の姿は、シェイクスピア劇の『リチャード三世』のリチャード (Richard) や『リア王』のエドモンドと重複する。ただ、ドン・ジョンは、こういった人々のようにアクティブに活動することも、自らアクションを起こしていくこともせず、心を閉ざし、風の当たらないところに閉じこもっている。彼は、義兄と俗世間に恨みを抱きつつ、自ら正面から立ち向かっていくことはせず、憂さ晴らしを唯一の楽しみとしている。しかしこれは、既に終結した戦争の延長であり、今度は武力ではなく、精神的なダメージを与えるために奔走しているにすぎないとも言えるだろう。人が苦しむのを見て楽しむ姿は、『オセロ』(Othello) においてイアゴ (Iago) がオセロ (Othello) を陥れる姿にも象徴されている。しかし、『ハムレット』(Hamlet) のような復讐悲劇が始まることもなく、ドン・ジョンは単なる悪さをするだけで、人を精神的に追い込んで喜びを感じて

いるのである。

ドン・ジョンの憂鬱なシーンの直後にくる仮面舞踏会は、華やかなシーンになっているが、最初に交わされるヒーローたちによる会話はドン・ジョンのことであり、次のようにドン・ジョンに対する不平から始まっている。

LEONATO     Was not Court John here at supper?

ANTONIO     I saw him not.

BEATRICE    How tartly that gentleman looks, I never can see him  
                  but I am heart-burned an hour after.

HERO         He is of a very melancholy disposition. (2. 1. 1-5)

仮面舞踏会が開かれるのは建物の内部ではあるが、ドン・ジョンのいる暗い室内とは違い、室内と言えども、もっと開けた空間である。ただ、1回目の仮面舞踏会ではドン・ジョンに振り回され、ドン・ジョンを信じたためにクロードディオはヒーローを疑うなど、危うく結婚が破談しそうになる。開けた空間であっても、室内にいと、ドン・ジョンに惑わされる傾向にあるようである。

作品の舞台となっているメシーナは戦場でも戦地へ行っている兵士の故郷でもなく、クロードディオの伯父、アントーニオ (Antonio) がいるというくらいで、ただ、戦地へ赴いていた兵士たちが逗留するだけの場所である。にもかかわらず、皆が喜びで沸き立ち、ほのぼのとした平和の雰囲気に含まれている。ベネディックとビアトリスの仲を取り持とうとするシーンは、レオナートの庭が舞台である。外の穏やかな空の下で繰り広げられる噂話と木の陰にベネディックとビアトリスそれぞれが隠れるシーンは、自然の営みとその自然を利用した心理合戦となっている。ここでは、自然の美しさが心を癒してくれていると言える。男性たちに“鬱”的な症状が見られたとしても、シシリーの風と女性たちの声によってそのような症状が飛ばされていくかのようなようである。

『から騒ぎ』が上演されていた時代、全ての病はガレノス医学 (Galenic



medicine) の4つの体液 (four humours) 論に基づき、血液、粘液、黄胆汁液、黒胆汁液のバランスが崩れた時に病気になるとされ、それぞれの体液をちょうどいい量にすること<sup>2</sup>が、最も効果的な治療とされていた。しかし、ここでは、戦争帰還者たちを体液論に頼らない治療法で回復させるために、風当たりのいい外気にさらすことと、笑いによる治療法を実施している。運動をさせることと、日光浴をさせることは、古代ギリシアの時代より実施されてきた治療法であるが、あえてこれらの方法を施すことで戦争帰還者たちが病に陥らないようにしていると考えられる。

同じ舞台の上ではあるが、恋の手助けのシーンはレオナートの庭が舞台であったのに対して、ドン・ジョンが自らの不幸を嘆くシーンは暗い室内である。ドン・ジョンは笑いのない室内に一人閉じこもり、人を寄せ付けなかったため、精神的な病の治療を拒否してしまったと言える。勝者であることと敗者であることの他に、勝者とドン・ジョンの明暗を分けたのは、メシーナの外気と風に舞う女性の笑い声という治療薬であることが分かる。

### 3. 女性のサポートによる症状の回復

戦争帰還者たちの精神面を支えたのは、勝者であるという喜びや、取り巻く環境の良さに加え、女性たちのサポートだと指摘することができる。『から騒ぎ』では、女性によるサポートが、その後の兵士たちの回復に大きく左右していることが暗示されている。

女性たちと共にする生活は、戦争中では味わうことのできなかつたものであり、女性と接することのなかつた男性たちは、戦争終了と同時に女性に興味を持ち始める。それにより、従来の落ち着きを取り戻していこうとする。女性は、そのような男性に添えていくことで男性を治療していく。勝者は浮かれている傾向にあるが、留守を守る女性たちは、かつてと変わることなく男性たちを待ち続けている。彼女たちの変わらない態度が帰還した男性たちの治療に貢献していると言えるだろう。以下、ベネディック、

クローディオ、ドン・ペドロ、ドン・ジョンの4人と女性との関わりを見ていく。

ベネディックはビアトリスのサポートにより、日常、つまり戦争に行く前の元の姿を取り戻すことが可能になる。ビアトリスのきつい口調がベネディックに対する何よりの治療薬となっているのである。ベネディックもビアトリスにすかさず言い返すことで、元の口論のテンポを掴んでいると言える。ベネディックの治療はビアトリスにしかできないものであり、そのため、終始ビアトリスが対応している。戦争から戻ってきた瞬間から口げんかを始めることで、ベネディックは戦争の疲れとトラウマを取り除くことが可能になったのである。故に、ビアトリスとの口論はベネディックの戦争後の疲労回復を促進するものとなっている。

しかし、ベネディックが帰還する前からビアトリスは“I pray you, is Segnor Montanto returned from the wars or no?”(1. 1. 23) と使者に尋ねるなど、彼のことをかなり心配していたことが分かる。だが、レオナートはベネディックとビアトリスの口論を“a kind of merry war”(1. 1. 45-6)と言うなど、二人の仲がいいことを認識している。また、ベネディックはビアトリスと一緒にいれば、戦後の精神不安に陥ることもなく、彼の疲労回復は彼女によって可能であることを示唆している。このことから、ベネディックは回復にあたり、条件が一番よく整っていたと言える。

クローディオには男性中心主義を垣間見ることができるため、ベネディックと異なり、女性のサポートが受けにくい環境にある。ヒーローに惚れ込みながらも、ヒーローではなく、ドン・ジョンを信用してしまうなど、クローディオは古代から続く男性結束の世界を尊重する。ドン・ペドロとの友情が、ヒーローではなくドン・ジョンを信用するように促してしまった(Bamber 120)と考えられる。ドン・ジョンに惑わされたのは、戦争中の不安と人への不信が残っていたためであり、それゆえ、『ロミオとジュリエット』(Romeo and Juliet) のロミオ(Romeo)のように一途にヒーローを

恋することはできなかったのである。むしろ、戦争中に活躍をしたクローディオは、自分をないがしろにされたひがみから、ヒーローを裏切るような行動を起こしてしまったのかもしれない。ここでは、彼の女性に対する恐怖心が見られる。ドン・ジョンからヒーローの不貞のことを聞かされた時、クローディオはドン・ジョンではなくヒーローを疑い、ふさぎ込む姿も見せている。女性のサポートを完全に感じ取っていないからこそ、また、信じるべき人を疑ったからこそ、彼は騙されたのである。

ドン・ペドロについては、彼は女性を口説くことに興味を持っていない(Levin 94)という指摘もあるが、実際に彼がビアトリスにプロポーズするシーンがある。ドン・ペドロはビアトリスに「陽気にしているのが一番合う」(p.188)というなど、彼女の気質に惚れていることが分かる。ビアトリスがベネディックと結ばれて一番ショックだったのは彼かもしれない。ドン・ペドロがホモであるという説もあるが、ビアトリスに申し込んでいるところを見ると、ホモではなさそうである。

この戯曲に登場する女性は、レオナートの娘のヒーロー、レオナートの姪のビアトリス、ヒーローの侍女のマーガレットとアーシュラの4名のみであり、そのため、ドン・ペドロがこの村で妻を見つけるとなると、身分相応のヒーローかビアトリスしか考えることができない。しかし、ドン・ペドロはクローディオにヒーローとの取り持ちを頼まれ、また、ベネディックを前にビアトリスが好きだと噂をする役である。人の世話係にすぎず、自身が恋をする機会は得ることができない。この村で彼は恋に縁はなかったが、唯一の救いは、彼が勝者であったことである。勝者だからこそ、村中の人々、特に女性たちも彼を歓迎し、彼に対して温かい目を向けたことである。

ここで強調すべき点は、勝者になることもなく、村の人々の温かいサポートがなかったとしたらドン・ペドロはドン・ジョンと同じ運命にあっていただかもしれないということである。ドン・ペドロの役割は愛を与えることであって、ドン・ジョンは愛を破壊することであると述べている(Hunter

94) 批評家もいる。しかし、ビアトリスがドン・ペドロは女性とつき合う準備ができていないと言う時、ドン・ペドロとドン・ジョンを結び付けている (Lavin 94) と指摘されているように、愛に対して本能のままに目を向けない姿は二人とも同じである。ただ、両者の明暗を分けたのは戦争であり、その戦争で勝者になったドン・ペドロにのみ女性たちが温かい目を向けていたに過ぎない。

ドン・ペドロは、“I do but stay till your marriage be consummate, and then go I toward Arragon”(3. 2. 1) とクロードイオに告げるが、女性に縁のない彼は本当の癒しをこの村では得られないと確信したため、この村を去ることに決めたのではないだろうか。勝者として扱われるよりも、一人の男になることを望んだと読み解くことができる。

人を避け、人を好きになれないドン・ジョンには、女性のサポートはない。そのため、戦後に起こるトラウマ状態は続く、という悪循環を繰り返している。敗者であってもドン・ペドロの義弟であるという理由からメシーナの人々に歓迎されるが、それは最初の場面のみで、実際にはビアトリスに、“How tartly that gentleman looks, I never can see him but I am heart-burned an hour after.”(2. 1. 3-4) と陰口をたたかれるような存在である。一人室内に閉じこもり、自ら否定的になっている。そのようなドン・ジョンの姿は次のように述べられている。

This character is not necessarily associated with bastardy, but we can infer that Don John was brought up in the shadow of Don Pedro's condescending glory. For the want of an actual father, his elder brother has become a father-substitute, and his own position has been usurped by the supplanting Claudio. (Scott 48-9)

メシーナの空気と風の中に響き渡る女性たちの声が間接的に戦争帰還者たちを治療しているにもかかわらず、この風に当たろうとさえしないドン・

ジョンは治療がなされないままである。恨みを抱くことしか頭にない彼に近づく女性は一人もいない。もし、親切にしてくれる女性がいたら状況は変わっていたかもしれない。現に、忠実な家臣のボラキオは、マーガレットと親しくしている。敗者に従う者でも「何でも言うことを聞く」女性がいると状況は違うものである。人を陥れる役目の登場人物、イアーゴ、エドモンド、リチャード3世にさえも妻や愛人がいるが、ドン・ジョンは完全に孤独である。家臣のボラキオとコンラッドが捕らえられた時、ドン・ジョンは逃亡したと告げられる。そしてボラキオとコンラッドの改心により、今までヒーローに対して言われてきたことが全てドン・ジョンによる企みであると判明するが、この瞬間、悪人はただ一人、ドン・ジョンだけになる。彼の孤独度が更に増した瞬間である。誰からも声をかけられることなく、クロードディオが結婚中止を宣言する場面を最後に舞台に戻ってくることはない。

最後の感動的なシーンが始まろうとしている中、ドン・ジョンの逮捕が告げられる。彼は戦争の敗者として捕われたのではなく、ヒーローとクロードディオに犯した罪の露見から捕えられる。ドン・ジョンにとっては、ドン・ペドロを苦しめることができれば相手は誰でもよく、直接彼を攻めずに彼の側近にダメージを与えたとも解釈できるが、ドン・ジョンによる結婚の邪魔立ては、義兄に対する腹いせのためだけでなく、自分へ目を向けない女性への恨みから起こったものなのかもしれない。そのため、ヒーローはドン・ジョンに武器として使われた犠牲者にすぎない (Bryant 133)。女性にも好かれないドン・ジョンはただ、結婚を台無しにすることで、女性に対する仕打ちをしているのである。女性のサポートを受けられなかったドン・ジョンは苦悩の内に自滅する。

## 結論

『から騒ぎ』では、敗者の心の苦しみや復讐心も一つのテーマとなり得る。ドン・ジョンは敗者としての扱いを受け、室内に閉じ込められ、女性から

も声を掛けてもらえなかった。これにより、敗者が敗者として苦しめられ、妨害行為に至った原因となったのである。

また、ドン・ジョンのような汚れ役ではないが、ドン・ペドロの落ち着いたの行動も女性のサポートが受けられなかった原因になっている。勝者であるが故にメシーナの爽やかな風を浴びることができたドン・ペドロであるが、人生の本当の満足感を得ることはできなかったようである。ドン・ペドロとドン・ジョン義兄弟を通して強調できることは、戦争帰還者にとって、女性からのサポートがあることが何より必要であったという事実である。

実際に兵士たちの精神的な疲れを修復していくのは女性たちであり、戦争に参加していない彼女たちがなだめていく。女性たちは、戦争から戻ってきた男性たちに対して戦争のことはまったく語らず、立派な兵士であるかどうかはもはや話題の中心ではなく、話題を終始恋に向けている。男性たちはこれにより戦争のことを忘れることができ、恋の駆け引きなどを通し、精神を盛り立てることができたのである。

南国イタリアの風が吹いているのが感じられるような、ほのぼのとした雰囲気の中で、恋の駆け引きと結婚が作品全体を構成しているが、むしろ、戦争が終わって帰還した男たちの回復物語として再読できるのではないだろうか。『から騒ぎ』は、女性たちの支えがあってこそその喜劇と言っても過言ではない。

註

- 1 本稿の引用は全てWilliam Shakespeare. *Much Ado about Nothing*. Ed. F. H. Mares. Cambridge: Cambridge UP, 2003. に拠る。
- 2 血液過多から生じるとされた病気の症状に対して放血 (bloodletting)、粘液過多になった時は利尿剤を用いた治療 (diuretic)、癩癩の症状に対して黄胆汁液を調節する嘔吐剤 (emetic)、鬱の症状が出た時には黒胆汁液を抜く下剤治療 (purging) を行なうことによって病氣治療がなされていた。

Works Cited

- Bamber, Linda. *Comic Women, Tragic Men: A Study of Gender and Genre in Shakespeare*. Stanford: Stanford UP, 1982. Print.
- Bryant, J. A. Jr. *Shakespeare & the Uses of Comedy*. Lexington, KT: The UP of Kentucky, 1986. Print.
- Bucknill, John Charles. *The Medical Knowledge of Shakespeare*. London: Longman, 1860. Print.
- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*. NY: The New York Review of Books, 2001. Print.
- Edgar, Irving I. *Shakespeare, Medicine and Psychiatry*. NY: Philosophical Library, 1970. Print.
- Goodland, Katharine. *Female Mourning and Tragedy in Medieval and Renaissance English Drama: From the Raising of Lazarus to King Lear*. Aldershot: Ashgate, 2005. Print.
- Hunter, Robert Grams. *Shakespeare and the Comedy of Forgiveness*. NY: Columbia UP, 1965. Print.
- McEachern, Claire. "Introduction." *Much Ado about Nothing*. London: Thomson Learning, 2006. Print.
- Scott, W. I. D. *Shakespeare's Melancholics*. London: Mills & Boon, 1962. Print.
- Shakespeare, William. *Much Ado about Nothing*. Ed. F. H. Mares. Cambridge: Cambridge UP, 2003. Print.

